



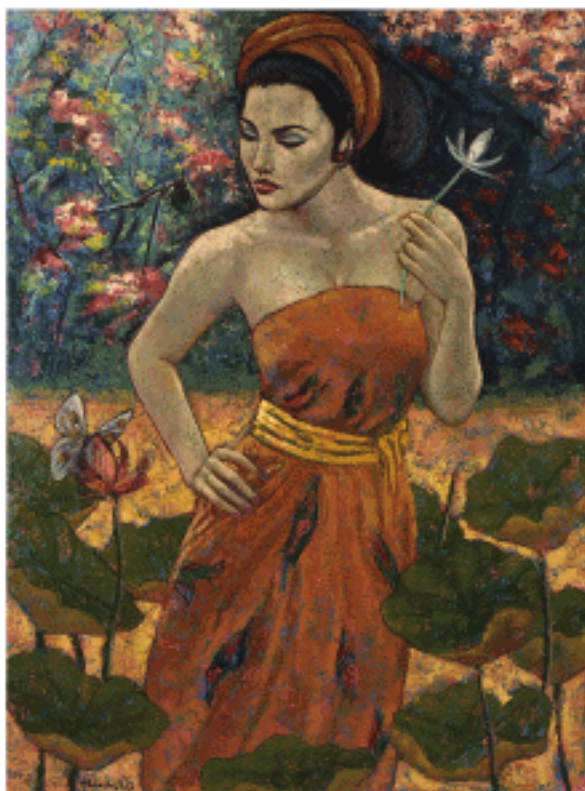
MUSICIAN

Southern Feeling

南国のアーティスト BAPAK (バパク) の世界

● ギャラリーさくら
山形市馬見ヶ崎3丁目1330 023-684-9570
sakura-e@cameo.plala.or.jp

インドネシアのバリ島。豊かな自然に恵まれた別世界、色彩鮮やかな楽園を想わせるその地で、BAPAK（本名モハメッド・バパクはインドネシア語でミスターの意）は絵画の制作を続けている。バリの光を浴び、そこで呼吸をする画家の時間の中から、さまざまな作品が描きだされてきた。リアリズム、抽象、ナイーフ、そして浮世絵的な作品まで、自由に表現の世界を行きかう画家の世界は、鮮やかな色彩に彩られ、形



KUPKUP

はいつも一番に選ばれていましたね。それ

式に捉われない人間の創造精神が横溢している。バリの多くの画家の中でトップクラスにある彼の作品は、すでにヨーロッパなどを中心に高い評価と人気を得ているが、今回初めて日本で紹介されることになった。

1951年にジャカルタで生まれたバパクは、子供の頃から絵を描くことで頭角をあらわした。

「小学校の3年生から絵を始めました。描いた絵



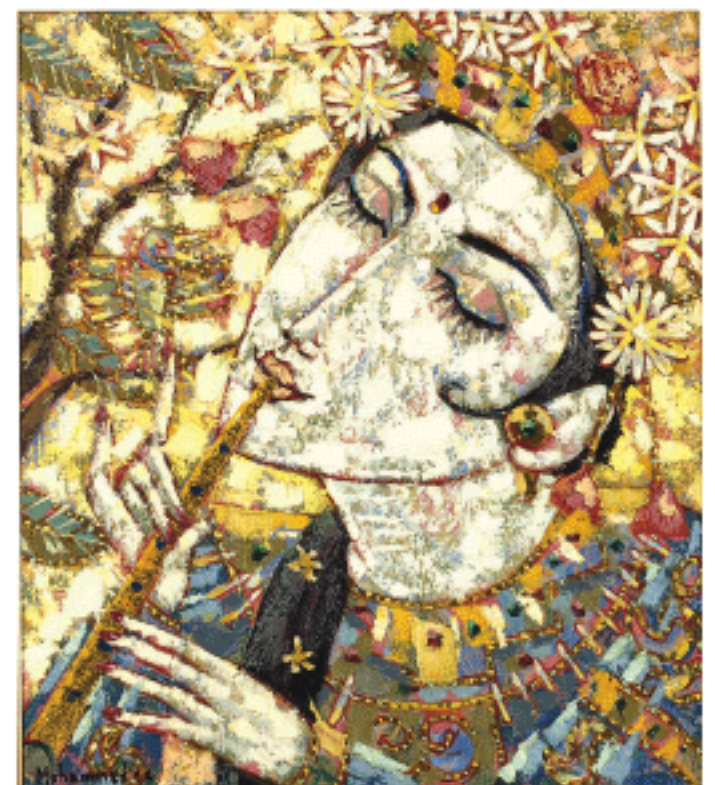
BALINESE DANCER

から色彩を使い出したのが高校生の時です。その後、バンドン工科大学芸術大学で4年間美術を学び、卒業してからは、パリに来て今のような絵を描き始めました」

すでに、パリで30年以上、画家として過ごしていることになるが、その間、パバクは、さまざまな技法を研究する一方、イギリスやシンガポールなどへ出かけ絵画指導を行う他、最近ではインドネシアの代表的画家としてASEANの美術プログラムにも協力している。

「いろいろな体験をすることが重要です。これまで印象派、リアリズム、セミ・アブストラクトなど、さまざまな技法の作品も描いてきましたが、それぞれを最高のレベルまでやってきました。最終的には絵の描き方は自分の世界ですから、そうした体験を通して、自分の世界を広げていくということですね」

そして、1986年からは日本の浮世絵的なスタイルの作品を制作するようになる。その描き方は、画家自身が名づけたナイーフ（ナイフ）というオリジナル・タッチで、その発想を得たのが、子供への絵画指導の時だったと言う。



FLUTE PLAYER1

「このスタイルは、シンガポールに絵を教えに行った時、子供が描いているのを見て、自分もののびのびと彼らのように描きたいという気持ちになったところから始まりました」

浮世絵スタイルが、子供の無邪気な描法を見たことからスタートしたというのが、非常にユニークだが、そんなことから、パバクは「もっと日本のことを体験したい、それで作品にしたい。日本の生活を経験して、ナイーフのスタイルで伝えたい」と、日本への興味を強くしている。自身の体験を通して、絵の世界を豊かに広げているパバクは、常に、新しい世界を創造している。